

まずは知ろう 考えよう

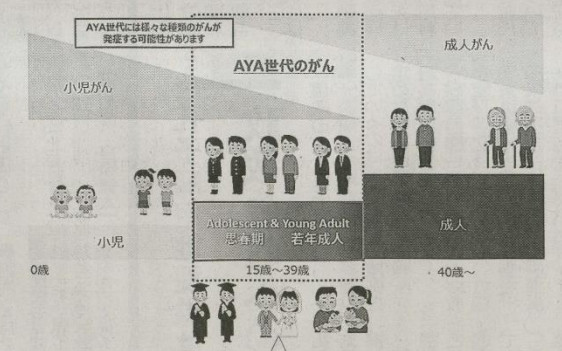


AYA世代のがんサイバーからAYAcancerIIに寄せられた色紙
岡山北區柳町1で

AYA世代がん 15~39歳で発症

日本人の2人に1人が罹患するといわれるがん。その中でも、15~39歳にがんを発症した患者を指す「AYA世代」(Adolescent&Young Adult 思春期・若年成人)に近年注目が集まっている。全国で年間約2万人のAYA世代ががんの診断を受けるといわれる。治療と並行してこの世代は受験や就職、結婚といった数多くのライフイベントがあり、その度に環境も大きく変化するため、より個々の状況に合わせた支援が必要だ。AYA世代のがん患者を支援するがん治療経験者や医療従事者の取り組みを取材した。

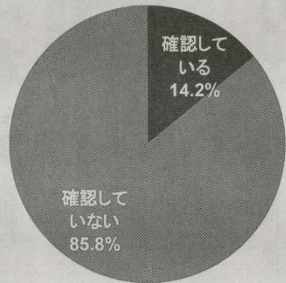
【戸田紗友和】



AYA世代の患者さんは就学、就職、結婚、出産、子育てなどの様々なライフイベントに直直し、一人ひとりが自分らしく過ごせるためのサポートが必要です。
※国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院提供



悪性腫瘍等の患者が治療をするとき、患者に「将来、子どもを持ちたいか」を確認しているか(797名)



●AYA世代のがん治療についてのオンライン市民公開講座の講師陣
○看護師を中心とした医療従事者が、がん患者に対して「将来子どもを持ちたいか」を確認しているのは14%程度にとどまった—岡山大の中塚幹也教授提供

受験、結婚、出産… さまざまなライフイベント

AYA世代が発症するがんの種類は多様だが、25歳未満だと希少がんや甲状腺がんなどが多く、25歳以上になると大がんと、中でも乳がんや子宮がんが増加する特徴がある。

全がん患者数に占めるAYA世代患者の割合は3%程度と少ない。その上、15歳未満の小児がんと40歳以上の成人がんの狭間の世代でもあり、診療体制がまだ十分に定まっていなかったため、医療従事者の中でも診察や相談支援の経験が蓄積されにくいという。

また、がん治療では抗がん剤・ホルモン剤の投与や放射線治療など、治療法や患者によっては生殖機能が落ちてしまう可能性があるという。国立病院機構名古屋医療

センターの堀部敬三医師らの研究や調査によると、AYA世代のがん経験者の主な悩みとして、生殖機能や後遺症、体力維持などが挙げられている。

中四国の11大学で構成する「中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム」は、今月11日、オンライン市民公開講座「AYA世代のがん治療 現状と最近の知見」を開催した。岡山大学院保健学研究科の中塚幹也教授やNPO法人代表「愛媛がんサポートおれんじ」の松本陽子さんらが登壇し、ウェブ会議システムを通じて約150人が耳を傾けた。

岡山大学病院輸血部の藤井伸治医師や同病院乳腺・内分泌外科の枝園忠彦医師は、AYA世代の罹患率が高い血液がんや乳がんについて、最新の研究や治療法などを講演した。妊娠できる可能性「妊孕性」について話した中塚教授は「がん患者の生存率も生殖医療も向上し、出産への期待が高まってきた。患者が納得して選択できるように、医師や看護師が生殖機能を温存する方法についてしっかりと術前に説明し、何度も患者の意思を確認することが大事だ」と指摘した。松本さんは「患者には精神的にどうした問題に向き合えないタイミングもあることを理解して医療スタッフが気にかけてあげてほしい」と求めた。

個々の状況に合わせ支援



AYAcAn!!のメンバー。(右上から時計回りに)代表のポーマン三枝さん、那須有美子さん、渡邊弥香さん=AYAcAn!!提供

AYA世代のがん患者が抱えている悩みは医療に関するばかりではない。がん治療で仕事や学業が続けられない、始められないといった事例や資金面での苦労など多岐に渡る。近年、患者らの精神面を支える場として、がん当事者や支援者らでつくるグループが増えている。

岡山県内の当事者らが中心となって2019年5月、若年性がんサポートグループ「AYAcAn!!」(アヤキャン)が発足。「誰もが自分らしく楽しく生きる」をテーマに月1回のオンラインサロンやおしゃべり会、クリスマス会など各種イベントを開いている。コロナ禍を受けて始まったオンラインサロンには県内外から参加があった。

設立のきっかけは、自身も30代でがん告知を受け、会の代表を務めるポーマン三枝さん(39)が、命や治療に関しての不安や術後の妊娠・出産についてなど抱えていた不安を相談する先が見つからなかった経験からだという。ポーマンさんとともに立ち上げに加わった岡山市の看護師、渡邊弥香さん(33)は、がん専門医療

機関での勤務経験から「病室内では同年代の患者同士で悩みを話し合ったり、気兼ねないおしゃべりをしたりできることが患者のメンタル面を支えていた」と話す。一方で「がんセンターのように同じような境遇の患者が集まる場所ばかりではない。がんを公表しない人が多い中で仲間を探すのは大変」と指摘する。

県内にはいくつかのがん患者会があるが、多くは高

気軽に話せる 場と教育必要

齢の患者。そうした会に参加したことがあるという40代の女性によると、悩みを相談しても気持ちを理解してもらえなかったり、話を聞いてもらえない場合もあるという。気軽に悩みを話したり、生活の知恵を共有する場を作りたいと、ポーマンさんらはアヤキャンを設立させた。

しかし、当事者や支援者だけががんについて知って

いても意味が無い。治療法の確立や早期発見によって生存率が向上していても、世間には「がん=死」というようなイメージが広がっていて、一般的にも医療スタッフから十分な説明が受けられなかったり、気が動転してしまう患者も多いという。

アヤキャンでは当事者への支援と並行し、がん教育や啓発活動にも力を入れている。メンバーで看護師の那須有美子さん(42)は「誰でもいつ発症するか分からない。知識を持っていれば早期に発見できる可能性も高まる。自分ではない周りの人が発症してもサポートできる。正しく恐れてがんを発症しても生きがいを持って働ける世の中になれば」と願う。

アヤキャンは21年3月20・21日、JR岡山駅前の商業施設「イコットニコット」(岡山市北区駅前町1)でAYA世代がんについての展示「AYAcAn!! Exhibition」を開く。全国のAYA世代がんサバイバーから寄せられた色紙や当事者らの抱えている悩みや課題を紹介する。問い合わせはAYAcAn!!事務局(ayacan2019@gmail.com)。